シリーズ「共に成長する」②互いに赦し合う　　マタイ 18:21～35

私たちは交わりの中で成長してゆくように造られています。そしてその交わりが良いものであればあるほど成長できます。交わりとは人と人とのつながりのことですが良いつながりを持つためには赦しが必要です。赦しは人と人の関係を深めるためには重要な要素です。ですから私たちは、絶えず人を赦し、また人からの赦しを受け取っていく必要があります。逆に憎しみ、復讐、反発、恨み・・こういった赦さないことからくるものは人と人との関係を薄め、遠ざけるものとなっても、近づけることはありません。さらに人を孤立させることになります。少し考えてみると分かると思います。憎しみを表したり怒っている人のそばに誰も近寄りたいと思いません。主イエス様も「主の祈り」を弟子たちに教えられた時に、これだけは人間が成長するうえで重要なものだけを短く主の祈りにまとめられました。主の祈りは私たちが人生を過ごしていくために必須の要素、エッセンスが入っています。主の祈りにおいては前半は神様と自分との関係のことついて言われています。人間のことについては「日ごとの糧」についての祈りがあり、その次に「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」とあります。人間関係に関してはこの箇所だけです。これは赦しがいかに人間関係つまり交わりにおいて重要な要素を占めているかを表わしていると理解できます。

本日の箇所は主イエスのたとえ話しですが、その前に主イエスと弟子ペテロの問答があります。ペテロは「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度までででしょうか。」と主イエスに問いかけました。主イエスは「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」主イエスのお答えはもちろん、490 回まで赦しなさいということではありません。赦すとはどういうことか、たとえ話を通して語っておられます。

ある王様から、しもべがお金を借りていました。額は一万タラントです。一タラントとは六千デナリになります。一デナリというのは当時の労働者の一日の賃金の相場でした。ですから一タラントは六千日分の賃金となります。一年に三百日働くとすれば、それは二十年分の賃金ということになります。一万タラントはその一万倍ですから、一人の人が一万タラントを稼ぐには二十万年かかるという計算になります。この一万タラントとは絶対に返すことのできない借金を、このしもべは王に対して負っているということなのです。そのしもべが借金の返済を求められました。当然、支払うことができません。王の前にひれ伏し、「どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします」（26 節）としきりに願いました。彼に返す当てがあるわけではありません。これはその場を逃れるための言葉です。しかしそのように必死に願う彼のことを、王は憐れに思いました。そして、驚くべきことに借金を赦し、借金を帳消しにしたのです。一生かかっても決して返すことのできない借金を、突然、もう返さなくてもよい、と免除されたのです。けれども、たとえ話は続きます。２８節です。「ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。」のです。百デナリとは、百日分の賃金です。100～200 万円程度でしょうか。その仲間は、彼にそういう額の負債を負っていたのです。彼はその仲間を捕まえて首を絞め、「借金を返せ」と迫りました。その人は「どうか待ってくれ。返すから」としきりに頼んだのです。つい先ほど、彼が主人の前でしたことと同じです。しかし彼は赦さず、借金を返せない者がつながれる牢にその人を放り込んでしまったのです。それを見た仲間の者たちが王に事の次第を告げると、王は彼を呼びつけ、「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』」と言いました。そして借金を帳消しにしたことを取りやめ、その者を一生牢に入れてしまったのです。

このたとえ話は、仲間を赦さないしもべの姿は、人間の身勝手さ、自分が人に与えている損害や迷惑はすぐに忘れてしまって、人が自分に与えている損害や迷惑ばかりに目が行ってしまうというという様子

をよく現しています。また、与えられている恵みをすぐに忘れて自分勝手に生きてしまう人間の姿を描いているとも言えます。そういう意味でこのしもべの姿は、私たち自身と重なるのです。

最初のペテロの問いかけに戻るとペテロは「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度までしょうか。」と言いました。主イエスは七の七十倍まで人を赦しなさいと言われました。この主イエスのお言葉は大変厳しい教えに聞こえます。無限に人を赦しなさい、ということです。主イエスはこのように教えられ、続けてたとえ話をされました。このたとえ話しでは、赦すとはどういうことか、赦しの本質について語っています。私たちは兄弟の自分に対する罪をどの程度赦すことができるのでしょうか。ある程度、また当然自分の赦せる範囲ではできると思います。けれども、そうはいかないときがあると思います。主イエスはたとえ話を通して、単に無限に赦しなさい、と言っているのではありません。きちんとした理由、赦しの理由、根拠を示しているのです。そのことをこのたとえ話は語っています。ペテロの問いかけは何回、どこまで赦すべきか、という問いでした。それに対して主イエスのお答えはなぜ赦すべきか、ということで答えておられるのです。

私たちはなぜ人の罪を赦すべきなのでしょうか。いや、本当に赦すことなど可能なのでしょうか。本日のたとえ話によりますと、私たち自身がもう既に、無限に大きな罪を赦されているということが示されました。一万タラントという、自分の力では一生かけても決して返すことのできない、償うことのできない負債、罪を、私たちは赦されたのです。ですので、このたとえ話によると大きな負債、罪を赦された私たちが、自分に百デナリの借金のある仲間を赦すのは人間として当然のことで、それをしないならば、このしもべのような振る舞いをすることになる、と話は語っています。私たちが人の罪を赦すのは、自分の罪が既に赦されているからなのです。自分に与えられている赦しの恵みがあるから、それに応えて、自分も人を赦す、それが私たちが人を赦すことなのです。赦さないなら罪によって本人が苦しむことになる。これがこのたとえ話で主イエスが語っておられることです。そしてそこにこそ、ペテロの七回と主イエスの七の七十倍の違いがあります。つまり、ペテロは、「七回まで」と言った時に、決心をしたのでしょう。七回までも人を赦すことができるような寛容な者となろう、そのような人間になるために努力しようと決心したのでしょう。ペテロにとって、人を赦すことは、そういう決意と努力によって行う良いことだったのです。しかし主イエスはそれに対して、七の七十倍まで赦しなさいと言われました。主イエスは、人を赦すことは、人間の決意や人間の業、努力によることではありません。そして、積極的に人を赦さなければならないのです。なぜならば、あなたがたは人が自分に犯している罪とは比べものにならないような大きな罪を赦されている者だからだ。そのことを本当に覚えるならば、七の七十倍まで人の罪を赦すことが当たり前のことになるのだ。これが、このたとえ話の意味です。ペテロは赦しは自分の決意や努力によってなされるものであると考えておりました。 どれぐらい自分は赦してあげることが出来るのかで悩んでいました。真面目に一生懸命、本音の自分と向き合ったことでしょう。それに対して、主イエスは神様の赦しの恵みに応えて生きるところに赦しは生まれてくるものだと言っておられるのです。「私はあの人を赦せるだろうか？　あのことを赦せるか？」この問は基本的に私がどこまで赦せるのかということであり、自分が赦せることの限界などを考えていると言えます。

クリスチャンはよく「助けてあげる側に立ちやすい人たち」と言われますし、それは良いことです。困っている人を助けたり、励ましたりできると嬉しいですよね。しかし、人を助けることが得意な人は、別の観点で考えるなら人に助けてもらうことが難しい人であるとも言えます。例えば、昔子供のころ、ちょっと家の手伝いをしたり、肩たたきなどしてあげると褒められて、自分もいい気になったりしましたが考えてみれば自分が親や周りの人たちにどんなにお世話になっているか。それと比べたら、ちょっと家の手伝いをしたぐらいでいい気になっている自分に恥ずかしくなります。同じように、自分が人を赦せるか赦

せないか、これは確かに大切な問いかけです。しかし、その前に自分のようなものが罪赦され、神の恵みによって立たせていただいていることの恵み、それをもっと味わうべきではないかということです。

そのことがこのたとえ話の中で一万タラントの借金を赦してもらったこのしもべであり、それは私たちの姿なのです。ですから自分が一万タラントを赦されたことが分からなければ、人を赦すことは結局人間の業でしかないのです。そこでは、できるだけ赦そうとは思うけれども、でもこれは赦せない、あれは赦せない、ということになり、結局「赦せない」という憎しみの思いに満たされていってしまうのです。私たちは、一万タラントの借金を、罪を負っている者であり、しかもそれを赦してもらった者なのです。私たちは日々、罪を重ねて生きています。その罪は私たちの中に積み上げられていきます。一万タラントという金額は、借金の額としては現実にあり得ないような金額です。しかし私たちが日々神様に対して犯している罪は、一万タラントという大きな額なのです。隣人に対してもまた、同額の大きな罪を犯しているのです。私たちは自分の力でこの罪を帳消しにすることはできません。私たち日々繰り返し、罪を重ねて生きているのです。

私たちの一万タラントの借金を、罪を、神様が赦して下さいました。主イエス・キリストの十字架によってです。一万タラントの借金を帳消しにするということは、この主人が、王が、それだけの損失を引き受けることです。この主人は、莫大な損失を引き受けることによって、この僕を赦してやったのです。27節に「かわいそうに思って」とあります。この言葉は、主イエスが私たちを憐れんで下さることを語るところに使われる言葉です。「「はらわたがよじれるような憐れみ」です。主イエスご自身が、罪人である私たちのために、痛み、苦しみを背負って下さる、そのような憐れみです。主イエスはそういう憐れみのみ心によって、損失を引き受けてくださったのです。私たちのために十字架にかかって下さいました。それは父なる神様が、かけがえのない独り子の命を犠牲にして、私たちの罪を赦して下さったということでもあるのです。

私たち人間が神様に赦して頂いた罪は本当に大きいものです。一万タラントの罪とも言えるでしょう。そして私たちの兄弟が、隣人が、私たちに対して犯している罪は、百デナリです。百デナリは相当の額です。人が自分に対して犯す罪によって私たちが傷つけられる、小さな傷ではありません。相当の痛みを伴い、苦しみを伴うのです。けれども、それはやはり百デナリです。一万タラントとは比べることすらできない、僅かなものです。一万タラントを神様が、独り子主イエスの十字架の苦しみと死とによって赦して下さったなら、それによって赦された私たちが、兄弟の百デナリを赦すことができないというのが、人間の姿なのです。

神様が先ず、私たちを赦して下さっています。神様が、独り子イエス・キリストの命という犠牲を払って私たちを赦して下さり、私たちに自由を与えて下さったのです。その恵み、自由の中で、私たちは、人を赦すことができます。赦さなければならないのではありません。赦された者だから、赦すのです。そこに、七の七十倍までの赦しが実現していきます。私たちのこの地上の歩みは、どうしても赦すことのできないことがあります。そしてそのことが気になってしょうがありません。気になるということは赦せないということです。赦せたら悩みません。そして多くの場合、復讐、仕返しを思います。それが正直に真実な自分の姿なのです。そこには優しい自分、思いやりのある自分の姿などはありません。その姿に気づくなら自分の赦された罪はいかに大きいのかということが分かってくるでしょう。それが分からなければ人の罪が気になり、特に自分と関わりのあることなら、赦すべきか、赦さざるべきか、そのことでずっと悩むことになるでしょう。

神様は御子イエス様が十字架におかかり下さったことによって、あなたの一万タラントの負債を、莫大な罪の負債を支払ったのですとおっしゃいます。赦し、赦されて互いに成長を目指しましょう。